はじめに

江戸時代の農村を研究していると、ある矛盾につきあたる。それは経済的に追い込まれて厳しい生活を余儀なくされた農民像と、村落において高度な知識と豊かな文化を示す史料の存在である。前者を象徴する出来事が災害・飢饉・百姓一揆であり、後者を代表するものが各地に開かれた寺子屋であり、残された大量の文書・書物と、建立された多くの石造物であろう。

青木虹二『百姓一揆総合年表』（三一書房、一九七五）によれば、天正一八年～慶応三年（一五九〇～一八六七）までの百姓一揆は、全国で三二一二件以上、都市騒擾（打ちこわし）・村方騒動などの諸騒動を含めると七五六三件に達するという。このうち上野国（群馬県）の一揆は七五件で、諸騒動を含めるとその総数は一八〇件となる（全国第一二位、第一位は信濃国の六一五件）。明治初期の上野国には二五町、二宿、一二二五村が存在したが（『旧高旧領取調帳』、一部現在の栃木県足利市域を含む）、百姓一揆は一件当たり数十か村が参加するものもあるため、上野国における発生頻度の地域性の傾向を論ずることは難しい。

一方、安丸良夫は、柳田国男『郷土生活の研究法』（刀江書院、一九三五）において、百姓一揆は「徳川三百年の間に一度しか起らず、村によってはまるまる起らなかった」という視点を紹

介している（『一揆・監獄・コスモロジー』朝日新聞社、一九九二）。しかし同書で安丸は再び柳田を引用して、一揆は「多数民庶の横列対等の交通」（柳田国男『都市と農村』朝日新聞社、一九二九）の証拠であり、限定地域の出来事であっても「近世社会の構造を日常態よりもいっそう深い次元から照らしだしていると考えることもできる」としている（安丸前掲書）。

江戸時代の百姓一揆に関しては、明治維新後に福沢諭吉が『学問のすゝめ』で佐倉宗五郎について論じ、小室信介が『東洋民権百家傳』で全国の代表的な百姓一揆を紹介し、その後、膨大で優れた研究が成された。その一端さえここでは紹介することができないが、敢えてあげるならばその運動構造と意識構造について理論化した深谷克己『百姓一揆の歴史的構造』（校倉書房、一九七九）、研究史や史料論をまとめた青木美智男『百姓一揆の時代』（校倉書房、一九九九）があげられよう。

また「ええじゃないか」や民衆自治に焦点を当てた伊藤忠士『「ええじゃないか」と近世社会』（校倉書房、一九九五）、全藩一揆や一揆の作法についてわかりやすく説いた保坂智『百姓一揆とその作法』（吉川弘文館、二〇〇二）、さらに保坂智他編『民衆運動史（全五巻）』（青木書店、二〇〇〇）は、多様な一揆研究の論説集であり興味深い。近年では若尾政希『百姓一揆』（岩波書店、二〇一八）が、一揆物語を題材に江戸時代の政治常識（仁政イデオロギー）を考察している。

その一方で、村落の文化については高橋敏『日本民衆教育史研究』（未来社、一九七八）は農

民の経済活動による「余力学問」から文化の享受が生まれたとした。さらに杉仁『近世の地域と在村文化』（吉川弘文館、二〇〇一）は、文人（農商人）による経済圏・市場と「在村文化」の交流には密接な関りがあるとした。

この農村をめぐる経済と文化の問題は、江戸時代の百姓一揆を考えるときにどのように捉えたら良いのであろうか。もちろん経済状況が各村の文化度向上に多大な貢献をし、村内での経済格差が、それぞれの家の子弟の識字率に影響を与えたことは想像に難くない。しかし貧しい村では一揆が絶えず、裕福な村では人々は俳諧に親しみ学問に励んだのであろうか。中島明「近世上州における百姓一揆の年次的研究」『群馬文化九九号』（一九六八）によれば、上野国の百姓一揆を含む諸騒動は、各郡に漏れなく記録がある。一方で全域に寺子屋が開かれたのも事実である（『群馬県庶民教育調査報告書』一九三六年調査、柳井久雄『群馬の寺子屋』みやま文庫、一九九〇）。

本書は明治二年（一八六九）に高崎藩（およそ現在の群馬県高崎市域）に勃発した「五万石騒動」（以下騒動と略す）について述べたものである。

序章「高崎藩の地理的状況と土地利用」は、同藩の農民が長い間高率年貢（米の付加税、畑方米納）などに苦しんだというが、これまで土地利用に関する言及は見られなかったため、特に米作りに重要な灌漑（かんがい）用水について注目したものである。

第一章「高崎藩の支配と構造」は、同藩の歴史的変遷と領内村々の年貢制度についての概説である。中でも騒動の背景となる高率年貢の原因について、序章の地理的状況から検討した。

第二章「騒動の発端」は、混乱期として幕末の慶応年間に高崎藩周辺で発生した世直し一揆を概観し、胎動期として維新期の東山道鎮撫総督府布告、目安箱設置、明治二年の天候不順を取り上げ、これらが騒動にどのような影響を与えたかを考えた。

第三章「騒動の勃発」は、同藩各村の連帯と周辺諸藩への越訴、農民たちの集結と高崎城下への押し出しについて、騒動の前半ともいうべき部分の経過を述べたものである。農民たちが細心の注意を払って組織を作り行動する過程に注目した。

第四章「転回する騒動」は、大惣代逮捕から蛇塚集会、下田家会談など、騒動の後半部分について述べたものである。農民たちと藩の主張に妥協点が見出せず、名主たちによる仲介など騒動は新展開を見せながら、地租改正に向けて収束していく過程は興味深い。

第五章「騒動の文化的背景」は、村落間のつながりや人的交流について、農業水利・助郷制度・寺子屋教育の視点から考察したものである。前述したように、江戸時代に育まれた庶民文化は高崎藩領内村々においても各地に華開いた。この結果生まれた文化的結合と、騒動との関わりを検討したものである。

終章「歴史の記憶と顕彰活動」は、騒動の関係者が著した文献史料（五十嵐伊十郎『義民の冤

罪』、細野格城『五萬石騒動』以下それぞれ『義民』『五萬石』と略す）を中心とした騒動の記録と、現在まで続く顕彰活動についてまとめたものである。

「五万石騒動」という言葉は聞いたことはあるが内容についてはわからないという方にも、既に興味があり詳しく知りたいという方にも、手に取っていただけるように本書には多数の写真や図・表を挿入した。なお騒動の研究は途上であり、多くの未知の部分が残されている。紙数の関係上、語り尽くすことができない部分があるが、それは全て筆者の力量不足によるものである。ご海容いただければ幸いである。

目　次

はじめに

序　章　高崎藩の地理的状況と土地利用……5

一　台地と扇状地の土地利用……5

㈠　台地と農業……5

㈡　榛名山麓の扇状地と農業……13

二　烏川右岸の土地利用……19

㈠　低地と丘陵……19

㈡　里見台地と烏川の段丘……23

第一章　高崎藩の支配と構造……30

一　高崎藩の歴史と構造……31

(一) 支配の変遷……31
(二) 高崎藩の支配と構造……34
二 城附領の支配体制……40
(一) 重い田方年貢……40
(二) 畑方米納と農民生活の実態……45
三 高崎藩古領における稲作の地理的条件……51
(一) 土壌と稲作……51
(二) 地質構造から見る古領の稲作……52
第二章 騒動の発端……58
一 混乱期……59
(一) 対外貿易の拡大と物価上昇……59
(二) 世直し一揆の発生……60
二 胎動期……66
(一) 東山道鎮撫総督府の布告と年貢半減令……66

(二) 目安箱の設置と版籍奉還……70
(三) 明治二年の天候不順……77
第三章　騒動の勃発……87
一　集結から越訴へ……88
(一) 会合と大惣代の選出……88
(二) 信濃国の状況……92
(三) 先行する西郷・東郷組……96
二　農民集結……99
(一) 五霊神社から天王森へ……99
(二) 岩鼻県から維新政府へ……103
第四章　転回する騒動……111
一　大惣代の逮捕と蛇塚集会……111

(一) 大惣代の逮捕……111
(二) 榛名山麓蛇塚集会と四者会談……117
二 地租改正と騒動の終息……124
(一) 関係者の逮捕と処罰……124
(二) 廃藩と高崎県の成立……126
第五章 騒動の文化的背景……132
一 村々の結合……133
(一) 農業水利と助郷制度……133
(二) 文化的結合……136
(三) 寺子屋師匠と騒動……140
二 大惣代小島文次郎の素顔……144
(一) 文次郎の教養……144
(二) 文次郎の周辺……146

終　章　歴史の記憶と顕彰活動……153
一　騒動の史料と出版活動……153
㈠　騒動と関係史料……153
㈡　『義民の冤罪』と『五萬石騒動』の比較……156
㈢　「聞見考證」の検討……163
㈣　第三の著述「百姓騒動實記」……166
二　騒動の顕彰と歴史的評価……173
あとがき……179
主な参考・引用文献……183
著者略歴……187